# JSSだより

シンガポール日本語補習授業校
The Japanese Supplementary School, Singapore (JSS)

「学校だより」第05号　文責　加藤
令和8年(2026年) 6月11日
ＨＰで公開中　www.jss.edu.sg

## 「補習校ができたころ」のお話です。

先日、本校の前身である「シンガポール日本語学校」を 1992 年 10 月に立ち上げた山口のり子さんが「懐かしい」との思いから、ご主人と一緒に日本から来校され、設立当時のお話を聞かせていただきました。（※その後、日本語学校は 1994 年 9 月に日本政府より日本語補習授業校として認定される。）山口のり子さんが数名の有志を集い日本人会会議室の一室を借りて、寺子屋式で始まった補習校はまもなく 34 年を迎えます。当初は十数名であった児童生徒が現在は約 350 名になり、アジアで最大の補習校になったことに大変感激なさっていました。これからもシンガポール日本語補習授業校を日本から温かく見守っていただきたいです。

## 「空振りにも意味がある！

私が補習校に着任してから保護者などの学校関係者に「私は、空振りを何回もするかもしれません。（※この時は交通事故についての話をしました。）でも、見過ごして大きな事故がおこらないように些細なことでも繰り返し言います。」という話をしました。

先日、ある保護者から「空振りという言葉はどちらかというとネガティブな言葉なのにどうして空振りと表現するのですか？」という質問を頂きました。多くの学校関係者に伝えている言葉なので、今回は「なぜ空振りという言葉を使うようになったのか？」について、そのきっかけとなったできごとについて触れたいと思います。

２０数年前、私は山沿いの農村部にある全児童数４０名にも満たない僻地の小学校で野球を指導していました。団員は３年生から６年までの総勢１２名でした。各種大会には出場していたのですがいつも１回戦で負けてばかりいました。私は何とか子どもたちに試合に勝つことを教えたいと考え、毎日子どもたちと汗を流して練習に

励んでいました。しかし、６年生が主力の他校のチームには、いつも勝つことはできませんでした。

　こんなチームでしたが１度だけ試合に勝ったことがあります。それは全道大会にもつながる大会の１回戦目の試合でした。相手チームの監督は練習の意味もあったのかエースではないピッチャーを登板させてきました。試合は大方の予想通りこちらは５回の表まで無得点（相手は４点）でした。うちのチームは後攻でした。５回の裏、１アウトとなった後、死球と四球でランナーが１，２塁となりました。ただ、次のバッターは９番（３年）です。３年生なので体も小さく、素振りをしてもバットが重くてバッターボックスの中で転んでしまうバッターでした。監督としては相手のピッチャーがストライクゾーンに投げづらいことを考え、バットを振らずに四球を選択する指示を出すこともできたのですが、日頃一所懸命にバットを振って練習している姿を見ているので間接的ではあっても「ただ立っているだけでいい」という指示は出せませんでした。逆に「日頃の練習の成果を見せるために思いっきり振っておいで」と言葉をかけ、バッターボックスに送り出しました。真面目な子だったのでどんなボール球でも思い切りバットを振り、空振りをする毎にバッターボックスで転んでいました。これで２アウトです。肩を落としてベンチに帰ってくる選手に「いいよ。全力で振っていたのがいい」とねぎらいの言葉をかけ、この試合も負けを覚悟し、今日は試合後にどんな励ましの言葉を子どもたちにかけるのかを考えました。そのようことを考えていたので、次の１番バッター（５年）がバッターボックスに向かうのも気付きませんでした。我に返ると既にピッチャーは振りかぶっていました。ところが、次の瞬間バッターは思いっきりボールをたたき、右中間にボールを運びました。ピッチャーは前のバッターの三振から油断して甘い球をど真ん中に投げたようです。思いもよらずボールが飛んできたことに驚いたのかライトの返球が遅れ、結果２点が入り、なおランナーが２塁となりました。次は２番（４年）です。ピッチャーは動揺しているようだったので私は「様子を見るように」と指示を出して送り出しました。予想通り粘った結果四球で出塁です。しかもその間、ワイルドピッチがあったのでランナーは３塁に進塁していました。次は３番（６年）です。「１塁ランナーを進めるから２球は待つように」と指示を出して送り出しました。盗塁成功です。明らかにピッチャーが動揺していることがその仕草から分かりました。次の投球はど真ん中に入り、打球はファーストの頭上を越え、ライトポール際の深いところにボールは転がっていきました。結果は３塁打でした。これで同点です。次は頼りになる４番（６年）です。ここで、ピッチャーを交代させるという選択も相手側にあったと思うのですが、そもそもこの試合は楽勝と考え、ピッチャーに自信を付けさせるのが今回登板させた目的だったと思うので、相手側としても代えるに代えられない状況だったようです。うちのバッターの５番以降は、また３・４年生が続きます。点を取るのはこのバッターしかいないと思い、私は４番バッターに「相手チームは

全員動揺しているから、バットを短く持って真ん中にボールが来たと思ったら思いっきり叩きなさい、２アウトだからフライが上がったら終わりになる。遠くに飛ばすことはないよ。」と指示を出しました。そして、２球目です。バッターは私の指示通りボールを思いっきり叩いたので、ボールは内野で高くバウンド、サードは捕球したのですが３累ランナーを気にして返球を迷ったようで結局どこにも投げることが出来ませんでした。なんとこれで逆転です。そして、次の瞬間審判が「準決勝、決勝以外は１時間３０分を過ぎて次のイニングには入らないという今回の試合の特別ルールに基づき、この時点でこの試合は終了です」と宣言。跳び上がってその場で喜んでいる子ども達をなだめ、並んで礼をさせた後ベンチ裏に移動しました。

試合後はいつもその場での反省会が決まりとなっていました。真っ先に私は、１球目にライト前にヒットを打った５年生に「よく１球目から自分で判断して思い切って打ったな」と言ったら、「だって監督、９番（３年）に思いっきり振ってこいって言ったじゃない。僕の時は何も言わなかったから同じ指示だと思った。」と答えました。この子は横で私が９番（３年）に指示を出していたのをしっかりと聞いていたのです。

この回答からこの勝利はただの偶然だけでは無かったことが理解できました。最初の大きな空振りをきっかけにそれぞれの子どもがその役割を果たし、相手の動揺を誘い、結果それまでの２年間、練習試合でも１度も勝てなかったチームの勝利につながったようでした。私はどの子どもも褒めましたが、特に空振りをした子どもを「あの空振りが相手ピッチャーの油断を誘い勝利に結びついた」ということで褒めてあげました。とても喜んでいました。当然選手層の薄いチームは同日に行われた２回戦目は負けました。

ただ、この日の勝利は私にとっても一生忘れることができない思い出となりました。今でもその時の光景が頭に浮かびます。試合に勝つことを教えたかった私が、試合に勝つ意味を子どもたちに教えられました試合でした。

## 「空振りにも意味がある！」

ただの勝ち負けで一喜一憂することもありますが、その結果をどのように捉え、どのように次に生かして行くのかは本当に考え方次第です。上記の相手チームは数年後、全道大会へ出場するような常勝チームになったと聞きました。ひょっとして自分たちも、そして相手チームも何かを変えることができた試合だったとしたら、それはとても素晴らしいことだと勝手に思いました。

この山間の学校は次の年１００年の歴史を残して閉校となりました。そして、この時以来、私は「例え空振りではあっても、そこには大きな意味があるかもしれない。」ということを考えるようになりました・・・とさ。